

# 1 ERを訪れる運動器疾患の全体像

星地亜都司

社会福祉法人 三井記念病院 副院長 / 整形外科部長

Point 1 専門医不在での対応であることをうまく患者に伝えられるようになる。

Point 2 除痛のために最低限必要なやり方を覚える。

## はじめに

ERを訪れる運動器疾患・外傷患者は多彩であり、数も多い。各病院での事情によっては、整形外科の研修経験に乏しいレジデントが初期対応をせざるを得ない。当直もしくはオンコール体制で相談ができる整形外科医がいれば問題が少ないかもしれないが、それでも診断を誤って、問題症例を専門医に相談しないまま安易に帰してしまう可能性は残る。まして、専門医と相談できない状況においては、翌日に患者が専門医にかかるまでに症状をほどほどにコントロールできて、かつ誤診などとあとでクレームをつけられないように、できるだけ知識と逃げ口上を身につけておく必要がある。

本特集では、専門医とすぐに相談できない状況におかれたレジデントを主に念頭に置いて、日ごろよく遭遇する運動器疾患についての対応の仕方、逃げ道などを学習してもらうこととした。ここでは、全体像と全般的な考え方を記載する。

## 1. 専門医不在のときの患者受け入れ

救急車あるいは患者からの問い合わせがあった場合に、病院の方針によって断ってはならない場合を別として（そのような病院がどの程度実在するかどうかはここでは置いておく）、とても対応できそうもない状況ならば他をあたってもらうしかないであろう。東京都であれば、“医療機関案内サービス ひまわり”（電話：03-5272-0303）という24時間医療案内があるため、対応してくれそうな指定2次救急医療機関をそこで相談するよう案内するという方法もありうる。

しかし、いつも断ってばかりいるわけにいかない事情がERにはあるはずである。対応せねばならない患者が来た場合、整形外科研修の経験がほとんどない場合には、“専門医でないものが初期対応を行うため、明日必ず専門医を受診するように”，というような説明を最初しておく必要がある。それならば他をあたる、といわれたらそれは仕方がないことである。



図1 簡易型ギブスシーネ

市販のものでは適当な長さにハサミで切り、片面を水道水で濡らし、バスタオルで拭いてから、患部に装着する。足関節を固定したい場合には、診察台から下腿を下垂させ、足関節を過度に底屈させない程度でシーネをあて、そのまま弾性包帯を巻く。5分ほどで硬化する。



## 2. 泥酔患者への対応

痛い場所をはっきり教えてくれないため、どこが患部なのかわかりにくい。少なくとも四肢については、明らかな変形や脱臼がないことは、ざっと触れば見当がつくものである。脳出血などによる意識障害ではないかどうか、注意が必要である。脳CT撮影までもっていける状況でなければ、付き添いの方に、本当はCT検査が必要だが、指示が本人に伝えられないため実施できないことを伝え、カルテに記載しておこう。

## 3. あとからクレームをつけられないための口上

専門医でないことをお断りし、入院の適応でないことをカルテに記載しておく。“骨折はありません”などの断定的な文言を避け、症状の推移次第でさらなる検査が必要となることを伝えたことも記載しておく。

## 4. 治療に使用するツール

### 困ったときのカロナール<sup>®</sup>、ペンタゾシン

急性腰痛、急性頸部痛、痛風発作時などに通常よく処方される薬は、ロキソニン<sup>®</sup>かボルタレン<sup>®</sup>であろう。後者のほうが効果は強い。念のためにプロトンポンプインヒビ

ター（proton pump inhibitor；PPI）を併用したほうが消化管に対する安全性に優れる。高齢者などで腎機能障害が危惧される状況では、代わりにカロナール<sup>®</sup>の大量処方をお勧めである（1回400～800mg、1日3回）。腎機能障害や消化管潰瘍誘発のリスクが少ないし、鎮痛効果も期待できる。

激痛で動けないような状況の場合入院対応が安全策であるが、それができない状況では、ペンタゾシン（ソセゴン<sup>®</sup>など）の筋注で除痛をはかり動けるようになったら帰宅させる、というやり方が許されるであろう。近年、トラマドールのような強力な経口または湿布タイプの鎮痛薬が使用できるようになっているが、副作用の問題があるため使用経験の少ない医師が使用するのには薦められない。翌日に専門医を受診することを勧め、入院させられない状況でやむをえず採った処置であることをカルテに記載しておく。夜間にどうしても帰宅させられそうもない場合には、翌朝、整形外科医出勤もしくは他の医療機関の業務開始まで、観察室で経過をみざるをえないであろう。

### 下腿ギブスシーネ

休日にはスポーツの試合も多く、下腿の肉離れ、足関節の捻挫・靭帯損傷・骨折の患者がERに押し寄せてくる。図1のような簡易型のギブスシーネで患部を固定すれば、移動可能となる。